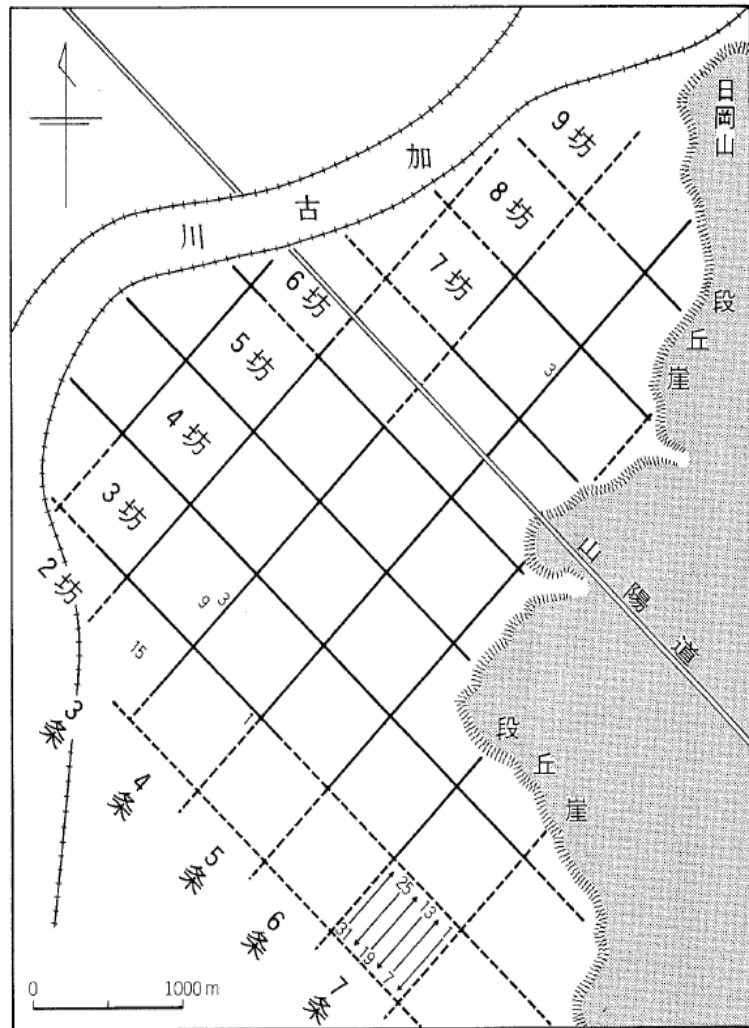


「賀古駅家、発掘ものがたり」 4 <古代山陽道の研究>

これまで、賀古駅家に関する研究は数多くあり、考古学者の間では全国的に有名な遺跡でした。

研究の流れをまとめると、大きく3つにまとめることができます。1つめは道、すなわち「古代の」山陽道の研究、2つめは出土品の研究、3つめは文献、伝承からの研究です。賀古駅家の研究ではこれら3つの研究が非常にうまく絡み合い、駅家研究の教科書的な存在となりました。

古代山陽道の研究には吉本昌弘氏の業績が上げられます（吉本昌弘 1985



年「播磨国の山陽道古代駅 加古川東岸条坊と坪並の復元案（『加古川市史』第一巻 路）『歴史と神戸』24-1）。氏は加古川周辺の低地に認められる縦横に均等な区画（条里地割）と、その区画には隙間（条里余剰帯）が存在することを明らかにされ、この隙間こそ古代山陽道の痕跡である、という説を発表されました。その幅は何と 18m（たつの市布勢駅家付近。25mプールの横幅程度）。

現在も市内の多くの場所にある家や道が北から東に約44°の角度で傾いているのは、奈良時代に行われた圃場整備（条里制）の影響を受けているためです。洗濯物を干すときに真南からお日様が当たらないのは奈良時代の土地区画のためなのです。

加古川町美乃利や大野ではこうした古代の地割りをよく観察することができますが、近年の区画整理や圃場整備によって急速に失われつつあるほか、条里地割りの坪番号が残る小字名（野口町水足の「十二町」、尾上町養田の「五ノ坪」など）が地名改変によってわからなくなるのは残念なことです。

さて、吉本氏が推定した古代山陽道は字（あざ）と字（あざ）の境界としても現存し

ています。野口町野口と古大内の字境、同じく坂元と良野の字境、二屋と新在家の字境などがそれにあたります。これらは全て一直線につながっています。特に野口と古大内・二屋の間には新在家の字が細長く入り込んでいますが、この幅こそが、古代山陽道の痕跡であると推定されています。

こうした字(あざ)や地割り、地名には1,300年もの歴史が今も刻まれているのです。

兵庫県立考古博物館 学芸員 中村 弘